

---

# 哀話

mine

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

哀話

### 【Nコード】

N5564T

### 【作者名】

mine

### 【あらすじ】

今は、想える人がいる。

今は、大切な仲間がいる。

…けれど、私は……だから、熱くなりすぎて、その内燃え尽きて…  
哀しい灰になる。

短編集―哀話。

## 来ないで（前書き）

組織壊滅後―コナンは元に戻っている設定。

来ないで

「新一！朝よ！！」

―この大声で、私まで起こされてるのだから…たまったもんじゃな  
いわ。

「新一！！」

しつこくインターフォンを鳴らしている様子は、容易に想像出来る。  
「遅刻するわよ！！」

―でも、まあ丁度良いのかもしれない。

このぐらいに起きないと…私も、学校に間に合わないし。

…でも、何故か嫌だ。

「おはよう…博士。」

「おはよう、哀君。」

…いいのかしらね。まだずっと…ここに居ても。

『心配するでない。そっちの方がわたしは嬉しいんじゃないから……減量は勘弁して欲しい所じゃがお……』

―最後の一言で、思わず笑ってお世話になる事を決めてしまったけど。

「……」

「どうしたんじゃない？ 哀君：朝食、食べんのか？」

なんか、ムシヤクシヤする。

「……悪いわね、博士。私、今日休むから……」

「あ、哀君？」

上がってきた階段を、もう一度戻り直す。

―何をしているのだろう。

彼のように、元の体に戻って…一人暮らしでもすればいいじゃないか。

そうすれば、博士に迷惑を掛ける事も無く…毎日を過ごせるじゃないか。

わざわざ、どうして―自分はこんな所に、この姿で居たがる？

周りの人々が、温かいから？

…それもある。

宮野志保として犯した罪を思い出したくないから？

…それもある。

元の体に戻ったら、組織の残党が潜んでた場合に、殺される可能性が高いから？

…それもある。

…でも、違う。

―私の心が弾き出した答えは、絶対に違う。

―彼の出来る限り近くに、居たいから。

…彼を、私の心が―求めるから。

どうしようもないくらいに…彼に惹きつけられて、どこまでも…心が飛んで行きそうな、そんな感覚がするから。

…でも、元の体に戻らないのは、それが「彼と彼女を苦しめる事に繋がるから」。

私なんかが戻れば…必ず、二人の間に亀裂を入れてしまう。

…勿論、私が彼を奪えるはずは無いのだけど。

けれど、亀裂を入れてしまう…お互いの信頼という関係の間に。

―勿論、私と彼の間にも。

それが…怖い。  
そんな事を…したくない。

―何処までも、私は逃げ続けるのかもしれない。

…そして、最近寝たり無いのも…そんな事ばかり考えてるからだろ  
うか。  
もうどうしようもないくらいに…頭痛、吐き気…

―学校にすら、行く気にならない。



…一番幸福なのは、眠れる事。  
眠る事で…その間、全てを忘れて―誰にも入り込まれない世界へと  
逃げられる事。

…そう、結局私は…逃げられる事が、幸福だから。

もう…彼なんかを求めてはいけない。

「灰原？」

—えっ…!?

「…入るぞ?」

な、なんで!?

彼は…さっきまで、寝てたはずじゃ…!

「灰—」

「来ないでっ!!」

半開きになったドアの向こうにいるはずの彼は…まだ見えない。

恐らく、彼は…すぐに、家を出てから…こっちに來たのだろう。

蘭さんを…無視して。

断ったのかもしれないし、そこで待ってもらってるのかもしれないが。

「どうしてだよ?」

「どうしても何も無い!とにかく、来ないで!!」

即座に、私の体が—拒絶を示した。

…答えは簡単。

「逃げたいから」

「来ないで!!」

…ここまで言っても、懲りない人間というのが世の中―それも、すぐ近くにはいるのだけでも。

勿論、扉が開いて―彼が中に入ってくる。

「灰原っ!」

…ほら、来た。

あれ……

「まったく…どうしたんだよ。灰原。」

…望んでる？私…

「灰原？」

—望んでる？

そう…彼の事を。

「おい、灰原…」

結局は、自分の望みは…隠せない？

「…灰原…」

「…誰から聞いたの？私の事…」

彼を求めている私の心は…隠しようが無い？

「…元太達。」

考えられるケースではあった。

…もう、どうしようもない子達なんだから…

「お前、最近…無理してるって聞いてさ。大丈夫か？本当に…」

…心配しないでと答えれば、彼はもっと心配するに違いない。  
けれど…

『今、私は求めてる。間違いなく、彼を。』

自分の中の、遠く…実現不可能な理想、妄想は―頭を駆け巡り、自然と言葉なって―発せられた。

「…大丈夫なわけじゃない。」

「え…」

…そう。

「―しばらく、抱き締めててくれる？」

私が、あなたの中で眠る時まで―といっても、彼は勿論、私の鼓動を早くして、寝かしてはくれないのだけど。

「…もう、来ないでなんて言わないから。」

…求めよう。出来る限り。

生きている間だけは…

―お姉ちゃんの分も。知ってる皆の分も。

…求めよう。

運命は必ずやってきて、私達を支配する。

逃げ切る事は…不可能だから。

…求めよう。

結局、私じゃどうせ…運命の中で輝く事すら出来ぬまま…消えていくのだろうけど。

「ああ…任せとけ。」

—彼の優しさだけが、私の心に染みる。

…だから、もっと哀しくなる。

—温もりの中で、静かな吐息を零した。

## 名前（前書き）

少し考察。灰原哀の名前の由来…



## 名前

―小学2年生の課題なんて、当たり前の話だけど、考える必要も無いも当然だ。

計算、漢字…作文だって、適当にやれば何とかなってしまう。

…当たり前と言えば、当たり前なのだが。

―けれど…

『今日は、ドリルも漢字練習帳もやらなくて良いですが―』

…面倒な課題が出た。正直、そういうタイプも嫌だけど、これはもつと嫌だ。

『自分の名前の由来を、調べて来て明日発表できるように作文を作ってくる事』

―まさか…何ていう…

…皆の前で、女探偵をもじって…何ていうのかしら。

でも、所詮…あれは、言い訳にしか過ぎないし。それでいいわよね…

わざわざ、今文章作らなくなったって、即興でなんとかなるわね…  
もう、寝ようかし…

―待って。

そういえば……私。

「宮野志保の由来すら知らない」

―そもそも、お母さんのテープの中には……それが無かった。  
もしかして……もう、3歳ぐらいの頃に伝えられてたのかもしれない。

なんなのだろう？ 一体……

私が、志保と名づけられた……理由？

……全く見当がつかないじゃない。

お姉ちゃんは、「明るく美しく」――結構、単純で……でも、本当にそうだから……少し、悔しい。

じゃあ…私は？

「志を保つ」？

…何を？

私なんか、そんな物…無い。

志も何も…そんな物、保つ以前に存在しない。

…分からない。私には…

…でも、ちゃんとした由来があるのだろう。  
だけど……灰原哀は…

―哀しく、灰のように燃え尽きるから―

博士には、最初そう説明した…そしたら、すぐに怒っちゃって。  
変えなくていいから、ちゃんとした由来を…って、何か工藤君系思考に走っちゃうし…

―誰が、女探偵二人のもじりだって分かるのかしら？

…むしろ、それなら―私は、こっちの方が良いと思う。  
ちゃんとした由来じゃない…これだって。

―事実なんだから。

工藤君の温かさに温められた。

…周りの温かさに温められた。

気付いたら―私を黒に染め上げた組織は、壊滅していた。

―もう、冷たい血は…徐々に、抜け始めている。

…けれど、もう私は熱くなり過ぎてる。

私は…いつも、彼らに温められ過ぎてる。

冷やすような水は…近くに存在しない。

…過剰に、温めたら…何でも、壊れる。

私は…自我を保っては居られない。

—そして、いつか…一定温度を超え、哀しく灰と化するのだ。

…絶対そうなる。私は、考えていない内に、密かにそう思いながら、その名前をつけたのかもしれない。

## 眩しすぎる(前書き)

哀ちゃん独白って、短くなって難しい…

## 眩しすぎる

お姉ちゃんみたいなお人だらけよね。

…米花町この人達は。それも、私の周りに限って…そう。

―博士。私の事を匿って…しかも、組織が潰れた後も、ずっと。  
―あの子達。犠牲になろうとした私を、助けてくれる事まで…

…挙げればキリがない。触れ合った人達、皆…そう。  
素直で―それも、優しすぎる。

…でも、彼だけは…優しいとか、そういう問題じゃない。

―窓を突き破ってまで…私を死なせようとはしなかったあなた。

…信じられないわ。消火器で窓破って…  
そして、あのタイミング。

―まるで、計ってたみたいに、あなたは現れたじゃない。

そう…最初から、出番を窺って…私が絶対絶命になった途端に、あなたは現れたじゃない。

…惹かれないはず、無いでしょ？

…でも。それが。

それ故に…その優しさ故に―

―眩しい。



何も…見えなくなってしまうくらいに。  
光が強すぎて、私の目を…貫いていく。

…何も見えないから…哀しいの。  
…何も見えないから…怖いの。

—いつ、無くなってしまうだろう？その輝きは…その光は。  
ずっと続く輝きだなんて…思えない。何物だって、必ず…光が消える。

どうしようもなくなる時が、来る。

…贅沢な話だ。闇から…黒の世界から抜け出したいのに、光の中、  
白の世界は見えない。  
—本当に、情けないわよね。

…少なくとも、今は、私には眩しすぎる。

ごめんね

—あなたは覚えていますか？

あなたに恋した、一人の少女の事を、覚えていますか？

通わされた学校で、アジア系だと馬鹿にされた私を庇って、何度も助けてくれたあなた……

もう忘れてしまった？それでも結構です。

……ごめんね。

私のせいで……

私が作ったあの薬を飲まされたせいで……死んだ。

……本当に、ごめんね。

全部私が悪いから……ごめんね。

ごめんね。

ごめんね。

……忘れたい。

こんな……悪夢。

都合が良すぎるよね。

彼が……私が密かに想い始めてた彼が、蘭さんと結婚してから、諦めた私があなたに会いに行くなんて……都合が良すぎるよね。

でも、最後に灰原哀として……言わせて。

……本当に、ごめんね。本当は好きだった——君。

## ごめんね（後書き）

最後の空白に自分の名前入れてみるのも、また読み方の一つかもしれません。

## グレース・アイハラ（前書き）

これは残酷過ぎる。注意。

今回は恋愛要素は薄いですが……ラストは、それらしさがあります。

## グレース・アイハラ

「隣のクラスに、哀そっくりの子が転校してきたんだって。」

「そんな歩美の話が、私の記憶を呼び戻した。」

「へえ……」

「なんか……雑誌で見たことあるわね……名前は……」

「グレース・アイハラじゃないですか!？」

「そうそう、そんな名前の……」

「アバラ……あんま美味しくねえぞ。」

「アイハラよ……」

「そっか……ははっ……」

「……」

「でも、多分違うよ。日本にそんな子が来たら有名になるだろうし……それに、年齢が違うよ。」

「そうね……私達は高1——あっ……」

「でも、そういう制限……帝丹高校にあったかしら……?」  
「もしかして、高校に初めて通う子だとしたら……?」

「まあ、そうですね……それじゃあ、灰原さん。帰りましょうか。」

「そ、そうね。」

……似てるからかしら。何か気になる…

~~~~~

「じゃあね。哀。」

「ええ、また明日。」

ここからの数百m……もう慣れた距離。

そして、その隣に彼の家がある。蘭さんと結婚した、彼の家が。

……慣れすぎて、もうつまらないくらい。

何時見ても同じ風景……

たまには、無理に遠回りしてみようかしら……



いいえ、完全に寄り道……ね。

~~~~~

(まさか……)

予想外。

(なんて……情けないの……)

あの灰原が……道に迷うとは。

そして、付近には……家もほとんど無い。

(……地図が見当たらない……携帯は電池切れてるし……ん……)

ふと、視界にポツンと建つ小さな家が視界に入った。

(ちょっと聞いてみようかしら……)

しかし、灰原が家に近づいた途端に――裏庭から鈍い音がした。

(何かしら……)

その方向に歩いていく灰原――

5秒後、体が凍りついた。

(っ！！！！)

目の前の……少女が自分の鏡のようで。  
殴られる度に、自分も――傷ついていく。

「やめっ、んっ、」

「ははっ！この子、散々自慢しといてこのザマよく全く、情けないわよね……」

「そうそう……スタイルばっかで、心が腐ってるからこうなるのよっ！」

「きゃっ……」

――やめなさい！

……とでも言えないだろうか。

言いたい……が、怖くて逃げたい。

正と負の感情が重なり、灰原の足を完全に止めた。

――±0

「髪染めて……気に食わないのよ！アイドルみたいにして！」

「ちがつ、これは地の髪……」

「嘘つくな！そんな髪の色、してる奴が――っ……」

その少女を虐めていた、二人の少女が灰原に気付く。

――それも、灰原の知り合いだった。

「な、何でもないわ。別に、髪の色なんてそれぞれだし……」

「そうそう！それじゃ、また明日！」

そして、足早に二人は立ち去った。

「大丈夫……ですか？」

灰原は、その少女に話し掛けられて、我を取り戻した。

「ごめんなさい……私のせいで批判されちゃって、傷つけちゃって……ごめんなさい。」

その少女は何度も頭を下げ、灰原の横を通り過ぎる。

―苦痛な表情を浮かべて。

「ねえ……」

灰原は、家に入る直前の彼女を止めた。

「あなた、もしかして……」

すると、少女は静かに微笑んだ。

「グレース・アイハラ……あの頃はまだ良かったわ。ちやほやされるのは悪くなかったし、ちゃんと友達も家族も、居たもの。」  
静かに、また微笑んだ。

）  
）  
）  
）  
）  
）

―これが、彼女から聞いた最後の言葉だった。

数日後…行方不明だった彼女は遺体で発見された。  
自らを…殺めた姿で。

―いづれこうなるのだろうか。  
彼を手に入れられなかった…私は。暗闇を進み…何も見つけられないまま。

自暴自棄になって、自らを殺めるのだろうか。

## 通学路（前書き）

自分の作品「この想いは…」第一話より、灰原の日掲載小説。

## 通学路

私はただの卑怯者だ。結局は組織の、真っ黒な女――

毎日のように、この試験管を手取る。

さりげない日々の会話から、彼はもう心待ちにしているのだろうと分かる。

出来てから……つまり、2年になってから2ヶ月が経とうとしている。そろそろ、帝丹高校は修学旅行の時期らしい。

だけど、渡したくない。何故か、渡したくない。

……最近思う。あの時蘭さんは結局は記憶は戻ってしまったけど、心の奥ではそのまま戻らない事を望んでいたのかもしれない。

過ぎた事は仕方ないけど、これから私が記憶を失くせば……  
――あなたと一緒にいる事が出来るかもしれないのに……

~~~~~



いつものように、着替える。

「博士。行って来ます…」

もう、この言葉を言う機会も決して多くは無いわね。

「行ってらっしゃい。哀君…っと！」

ピンポーン…

「あら…」

彼が、呼び鈴を鳴らしに来た。

最近、皆で学校に通うようにしている。まあ、蘭さんがやや元気

が無いのが原因かもしれないけど…って言っても十分元気よね。

そういえば、ここまでで…もう私以外全員揃ってるのよね。私が最後ってわけか…

「ほっほ…本当に、いい子供達じゃのお。」

「そうね…本当に、灰原哀として生きて…正解だったわ。」

そう、この姿で無ければ生まれなかった、親友達。

「まあ、もうその姿も…そんなに長い時間は見せられんのか…」

「…そうね。まあ、待たせると悪いから…行って来ます。」

「行ってらっしゃい。哀君。」

そう、この博士の挨拶も…もうそんなに多く聞く機会は無いのよね。

ガチャ

扉を開ければ、必ず目に最初に飛び込んでくるのは―彼

「ふう：おはよう、皆。」

「お、灰原。」

「おはよう！哀ちゃん！」

次々と、挨拶をしてくれる：

「おはよう、哀ちゃん。」

3日連続で、彼女が最後。蘭さん まあ、たまたまでしょうけど。

歩き始めれば、いつもの、朝の通学風景。

見慣れた仲間達、高校生達が、周りを囲む。

そして最近、一際元気なのは、彼の声。

「おう、灰原。どうだ？調子は：」

「あのねえ：昨日、まだ2割も出来てないって言ったばかりでしょう？」

嘘よ。もうとづくに出来てる。

「そ、そっか。まあ、体にあんまり負担掛けねえように、頑張れよ。今もかなり眠そうだし…」

…そうね。もう無理なんかしてないけど。もはや眠れないのよ。悪夢ばかり…

「…分かってるわ。」

私がそう言うと、彼は、笑顔になった。

「そうだぜ。無理する事はねえよ…戻れば問題ねえしな。」

「…そうね。」

彼は、今たった一つの事を望んでいるのだろう。

『早く元の体に戻りたい』

―勿論よね。うずうずしているでしょうし…毎日、待ちきれなくてしょうがないでしょうし。

まあ、当たり前よね…元の姿に戻った時だって、24時間の制約<sup>ルール</sup>がつくから。

…でも、戻したくは無い。私は。

どうしても。

どうしても…

一方、彼女は最近少し笑顔が減った。

「…ねえ、蘭。最近、新一君からは連絡来てる？」  
「うん…でも、何だかまだまだ帰って来ないみたい…大学、どうするんだろ…」

……

「そうよねー…まったく、本当に何処をほっつき歩いてるのかしら…」  
「…私ね。思うんだ。」

「え？」

ふーん…勘付いているのね。

「この前、ニュースでやってたでしょ？謎の組織の事件…あれに関わってたと思うんだ。」

正解よ。工藤君が、江戸川君の姿で関わっていたわ。

「だから、新一は戻って来れなかったのよ…あんなに大きな事件に関わってたんだから…」  
「なるほど…」

大正解よ。でも…工藤君じゃないわ。江戸川君よ。

「でも、じゃあどうして戻ってこないの？蘭の事、放って置いて…」  
江戸川君の姿だからよ。

「うーん…わかんないな。私には…」

当たり前ね。まさかすぐそこにいるなんて、思っていないでしょうし？

「…とにかく、酷いわよ。あんたの旦那は…」

酷いのは彼じゃないわ。私よ。私。彼を小さくした原因を upbringing た、悪魔のような小娘よ。

…そうとは言えないけど。

「旦那じゃないって…でも、いつか戻ってくるよ…新一は…」

そうね。私が認めれば、すぐにでも戻ってくるわよ？  
こんな悪魔のような小娘のせいで戻って来れないのよ。

本当に、ごめんなさ…い…ね…

っ…

「そうよね！頑張りなさいよ！蘭！他の女の子に負けちゃだめよ！  
！」

「園子ー！負けちゃだめよ…って…そんな競争じゃないんだから…」  
「何言ってるのよ！蘭！恋は競争よ。新一君は倍率高いんだから！  
頑張らなくちゃいけないわ…最後は勝つのは一人。全ての敵を跳ね  
除けなさい！！」

「もう…本当にハイテンションなんだから…」

…あなたは、本心ではきつと負けるはずが無いって思ってるでし  
ょうね？



鈴木さんじゃないわよ？ 蘭さん、あなたの事を言ってるのよ？

勿論よね…幼馴染で、恋愛感情を既に持っている、あなた達。

工藤君と、一番いいムードになってるのはあなたでしようから…敵なんて、いるはずが無いのよね。

「まっ…負けるはず無いか。」

「もう、園子ったら…」

…その通りよ。私が立ち向かったって勝てる相手じゃない。

…戻ってから、彼女に勝てるとは思えない。あんな、太陽のような彼女に。

—私の姉に似た、彼女に。この悪魔のような小娘、黒の組織の中で作り上げられた私が勝てるわけが無い。

優しさも、明るさも、精神の強さも、力の強さも。

そして—工藤君への想い…全て。

何もかも、彼女が上。そして、私が下。

そう、相手が工藤君ならば。

頭のスイッチを、取り敢えず切り替える。

そういえば…これは聞いておかないと…

（ねえ、江戸川君。戻ったら、どこの大学に行くの…？）  
（うーん…帝丹大学に行くか、それか蘭と一緒に探偵事務所開いち  
まうかどっちかな…）

っ…

(…そう。)

(最悪、高校退学になっても、もう一回受験し直せばいいしな。)

やっぱり…彼は、蘭さんを想っているのね。

彼の頭脳なら、東大も余裕でしように…帝丹大学って限定して、行きたがるなんて…つまり、蘭さんと一緒に行きたいのね？

それを取ろうとするなんて…虫が良すぎる。

でも…

やっぱり…

この想いは…

（そしたら、お前も帝丹大学に来たらどうだ？）  
（…そうね。考えておくわ。）

でも、この姿じゃないと、勝てない気がする。

『江戸川コナン』を一番知っている、この姿で無ければ。

江戸川君への想い、知識…私には、分かる。彼の事は、良く分かっている。

それだけあれば…勝てる気がする。

蘭さんと、江戸川君の間に沢山の思い出があったとしても、運命共同体としての、私なら。

江戸川君との経験は、馬鹿にされないほどある。パートナー相棒として、もう十分経験は多いし、これからも長い月日を刻んでいける。

私は宮野志保ではない。灰原哀なのだ…そう思い込めば…勝てる気がする。

ただ、ひたすら『灰原哀』として、『江戸川コナン』に恋すれば、勝てる気がする。

「あー！また二人でひそひそ話してるー！！」

「あ、歩美ちゃん…」

「もう…本当に、仲いいよね…」

「…ごめんなさいね。吉田さん。」

「ううん。いいの…ねえ、哀ちゃん。これから、私の事…『歩美』  
って呼んで？」

「え…」

「私も、『哀』って呼ぶからさ！お願い！」

…それだけは無理…って言いたいけど…あなただけは、仕方ないわ  
ね。

「分かったわ…っ…歩美。」

「うん！これからもよろしくね！哀！！」

凄い、笑顔だ。

はじけるような、幼い笑顔。  
余りにも、明るい。そして、綺麗だ。

私に、こんな顔は一生できないのかな…

そういえば…：…どうなんだろう…歩美も。

『江戸川コナン』の事を好きである人間の、一人。

もしも、真の姿を知ったら…少し、落胆させてしまうかもしれない。

それもしたくない。彼女を、絶対に苦しめたくない。

大切な、『灰原哀』の親友。

だったら、戻さなくてもいいんじゃないか？親友である彼女を落ち

込ませないためにも、この姿のまま放って置いたほうがいいんじゃないか？その方が、喜ぶ人もいるのだから。

蘭さんなら、他の恋人だって作れるだろう…彼女の明るさ、美しさならば。

それならば、今にでもA P T X 4 8 6 9のデータを完全破壊すればいい—そう、もう元に戻る道を消してしまえばいい…

私にはそれが可能だ。F B Iも、バックアップは取っていない…私に、一任してくれた。

組織壊滅後に、全てをジョディ先生に明かし、私達の事を話したら…『そのような危険な薬物は、この世に残してはいけないわ。』

もう、完全に信頼してくれているのだ。

だから、そ・も・そ・も・解・毒・剤・を・作・る・事・が・出・来・な・か・つ・た・と・言・い・訳・し・て・、  
デ・ー・タ・を・消・し・て・全・て・終・わ・り・に・し・て・し・ま・え・ば・、  
い・い・の・で・は・な・い・だ・ろ・う・か・？

それでも、蘭さんは大丈夫だろうし、歩美だってまだ幼い…想いなんて、コロコロ変わっていくだろう。

私の、この想いは…今は、全てを知っている、彼の方向にしか向かない。

阿笠博士は、フサエさんと結婚して、近い内に日本を去っていく…もう、気にする必要も無い。

だったらこの選択でいいのではないか？

そうやっても大丈夫なのではないだろうか？

それは、決して逃げるという選択には当たらないのではないだろうか？



そんな余りにも卑劣すぎる言い訳すら考える…この通学路。  
何故、こんな言い訳を考えるのだろうか。

こんな事が、許されるはずが無いのに。

逃げるのに当たらない？

馬鹿ね…そんなわけ、ない。

それに、被害が及ぶのは蘭さんだけじゃない。

遠山さんだって、鈴木さんだって怒るだろう…工藤君に。例え、江戸川君が認めてくれたとしても、周囲<sup>まわり</sup>が認めてくれるはずはない。  
そうすれば、一番辛いのは江戸川君なのではないだろうか？

そうして、蘭さん達に実質的に非難されている事になる、江戸川君  
なのではないだろうか？

江戸川君が、私を望んでくれたとしたしても…それは、間違った選  
択になってしまうのではないだろうか？

結局は、江戸川君から私の元を離れていくのではないか？

そして、年の差に耐えて、付き合い始めてしまうのではないだろう

か？

ただただ…そんな卑怯な理由で、人を傷つけてしまっていないはずがない。

いつまでも望むのは、江戸川君と工藤君が一人ずついる事。

：何故か、腹が立つ。時の流れには逆らえない。だから、存在する二人は、片方しか同じ時間に存在しない。  
逆らって戻ったけど、結局は逆らえずにまた戻されるか…もう時を動かないようにするか。

片方しか、選択肢を取れない。

ふふっ…笑っちゃうわね。何で…私。こんな事で悩むようになったのかしら…

.....

.....  
ダメね。

.....

久しぶりに聞かせて…

お姉ちゃん？

頼らないようにって決めたけど…一つだけ、  
答えを教えてくださいませ  
んか？

とても、私は大変な悩みを抱えています。

―そして今、私にはその悩みに対する、2つの選択権があります。  
1つは時を元に戻す事で全てを元に戻し、自分は一人悲痛な日々を送る選択です。  
もう1つは時を動かさない事で望みを叶える代わりに、周囲を壊してしまう、選択です。

それでは、お姉ちゃん…教えてくれませんか？

どっちが正解ですか？

それとも、他に答えがありますか？

時に：逆らえますか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5564t/>

---

哀話

2011年10月8日07時07分発行